

<研究ノート> 教職課程・保育士養成課程の「保育内容（言葉）？」の授業におけるアクティヴ・ラーニング的方法の試み

著者	三浦 正雄
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	18
ページ	259-265
発行年	2018-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001175/



教職課程・保育士養成課程の「保育内容（言葉）Ⅱ」の授業におけるアクティヴ・ラーニング的方法の試み

An Experiment in the Active Learning Method from Lectures on a Study of Childhood Education Contents (Language) in Teacher and Nursery Teacher Training Courses

三 浦 正 雄

MIURA, Masao

序

昨年度、類似のタイトルで国語表現系の授業についての実践報告を行った。本来は、その続編を執筆し、昨今の教育方法論にも言及する予定であったが、諸事情により本年は「保育内容（言葉）」における同様の実践報告を発表する。

現任校では現在、「保育内容（言葉）」に関する科目は、「保育内容（言葉）Ⅰ」「保育内容（言葉）Ⅱ」の2科目があり、2学年までに「保育内容」の五領域の全科目をひととおり履修した学生が、3～4年時に、五領域それぞれのⅡの科目の中から選択する履修形態となっている。筆者は、かつて「保育内容（言葉）Ⅰ」も数年間担当したが、現在は長きにわたって「保育内容（言葉）Ⅱ」を担当している。

この科目は、教職課程及び保育士養成課程において選択必修科目となっている。乳幼児期の教育内容は未分化の面があるため教科を立てず、教育内容を五領域に分け、五つの角

度から教育を行ってゆく「保育内容の五領域」の一つである。よって言葉の発達を促してゆく指導が中心となるわけであるが、そのために中心となる柱は主に二つある。一つは、年齢による言葉の発達過程の平均的なモデルを学習し、それをふまえて現場での教育を行ってゆくための知識と情報を学習することである。もう一つは、様々な言葉に関する児童文化財について学び、その手法と適した年齢・時期や導入・展開等について学習することである。

前者と後者は相即しあっているわけだが、Ⅰにおいては年齢による発達段階の学習は欠かせないため、これをふまえたうえでⅡにおいては、主に言葉に関する児童文化財について学習するという設定で授業を行っている。また、五領域のⅡの科目は、どれも演習形式が認められているため、演習科目において重要な研究発表、実演、そして言葉に関する児童文化財を扱っている学外施設や展覧会の見学を行っている。

昨年度の国語表現系の授業についての実践

キーワード：言葉、アクティヴ・ラーニング、教職課程、保育士養成課程

Key words : language, active learning, teacher training course, nursery teacher training course

報告においても記したが、筆者は、これまですべての授業において、発表形式の援用やコメント用紙・提出物等によるフィードバックを行ってきた。特に、コメント用紙は、授業回数である15回分の感想や意見をふくむコメントが、回のテーマと共に書き込めるようになっている。そして、コメント用紙や提出物により学生のコメントを掲載したプリントを作成し、次の回には、最初にこのプリントを読み解説するところから始まる。優れた意見やユニークな意見等については口頭で論評を付している。この方式は、教職課程及び保育士養成課程の専門科目においても同様である。

ここでは、この科目におけるこれまでの授業における様々なフィードバックを振り返りながら考察を試みたい。

一、科目のガイダンス

授業の第1回は、授業の概要の説明となっている。言葉に関する児童文化財の重要性とその活用の方法の概要を説明し、選択肢を提示して、研究発表の題材を考えてもらう。また、言葉に関する児童文化財について学習できる学外施設についても考えてもらう。この二つの投げかけは、事例を提示しながら行い、第2回以降に決定するのである。

児童文化財の実例は、形態において分類すると、物語性のあるものとしては、絵本・紙芝居・ストーリーテリング・朗読（音読）などがあげられる。また、物語性は少ないものとしては、言葉遊び・わらべうたなどがあげられる。また、内容において分類すると、物語性のあるものは、昔話（隣接しているものに神話・伝説）・童話（児童文学）・実話（ノンフィクション・伝記）がある。物語性の少ないものとしては、言葉遊び・わらべうたに

加えて、物語性の少ない絵本や図鑑などがあげられる。筆者は、授業による学習であるため、選択の幅が多く、鑑識眼の必要な物語性のあるものを研究発表の対象とすることを勧めている。

また、言葉に関する児童文化財を扱っている学外施設や展覧会の見学についても、モデルケースを示したうえで、学生の意向を聞きながら決定するのであるが、時間の余裕を設けて第2回以降に決定することになっている。

以下、ガイダンスについての学生のコメントを引用して若干の考察を加えてみたい。

- ・講義内容について知ることができた。童話等学び続けなければならないと理解できた。知らないことにも積極的に取り組みたい。（I）
- ・童話と昔話の違いについて再確認した。保育者として本の作者や作品について知るとは、基礎力の向上につながる。（H）
- ・実習に使えるものが多く、ためになる授業だ。（K）
- ・美術館などはなかなか行く機会がないので、授業で行けるのは楽しみだ。（S）
- ・自分自身で進めていかないといけないことに驚いた。（N）
- ・子どもとの関わりに必要な媒体を学ぶので、役に立つ。（T）
- ・あらゆる視点から学ぶ必要性を感じた。（I）
- ・調査学習は大変そう。活動が多く充実している。（N）
- ・童話と昔話の違いを理解できた。素話でできるようになりたい。（N）
- ・児童文化財に対する熱意をもって取り組まなければならない授業だ。（K）

- ・調べてから実演することで内容の理解を深めることができる。(S)
- ・施設見学が楽しみだ。ストーリーテリングができたらかっこいい。(K)
- ・童話や昔話に興味があったので発表を聞くのが楽しみだ。(S)
- ・昔話と童話の認識が逆だった。(I)
- ・研究発表は人数が多いので緊張する。自分なりのまとめ方で頑張りたい。(K)

上記のように、童話と昔話について、興味がある学生が多く、それでも両者の定義を理解できていない、あるいは曖昧な学生もいるということが把握できる。また、専門職として、この分野の知識が非常に重要であり、実際に使いこなせることや見聞を広めることにも関心を示していることがわかる。

二、研究発表を行うための準備

1、2年時に演習科目等において、研究発表の方法については十分に学習してきている学生ではあるが、研究の調査とまとめ方、発表の仕方など習得しきれていない点も多々見受けられる。

よって、研究発表そのものについて、再度、確認する必要がある。また、言葉に関する児童文化財に特化した研究発表の方法についても、言及する必要がある。

研究発表そのものに関する指導は、主に①調べ学習の時間を取る前に、全体に対して、簡明に指導するもの、②調べ学習が始まった後、個別に指導するもの、という二本立てで行っている。

まず①の全体に対する研究発表指導であるが、一般的な指導事項としては、(1)取り上げる題材とある角度から発表のテーマを考える、

(2)参考文献を使用して取捨選択し、必要に応じて、内容をまとめる、(3)(2)に対して、自身の見解を考える、(4)参考文献は、書籍・論文などの活字文献を重視し、ネット文献は客観性が高いもののみを参照年月日を付して使用する、(5)発表に際しては、レジュメを作成し、調べたことのまとめと自身の見解、参考文献を掲載する、(6)研究と実践とを結びつけ、発表の一環として、何らかの児童文化財の実演を行う、というのが研究発表の流れの指導である。

言葉に関する児童文化財に特化した指導も、同時に行う。先述した形態における分類とその小分類、内容における分類とその小分類について説明し、それぞれのテーマに応じたアプローチの仕方を例示する。言葉に関する児童文化財のうち物語性のあるものを取り上げることが推奨しているが、その場合には、主に二つの要素を取り上げる必要がある。一つは、作品の時代背景、作者についての知識や情報、一般的にどのようなメッセージの作品と解釈されるかとそれ以外の解釈の可能性、など文学作品・芸術作品として児童文化財を鑑賞し考察するという点である。二つ目は、教材としてどのような位置づけをすべきか、実演にあたってどのような準備をしてどのような点に注意すべきか、どのように導入しどのように発展させるかなどの教材として児童文化財をどう扱うかという点である。この二点をふまえた発表を行うことが、重要である。

このような指導を行ったうえで、調べ学習に入る。やはり自分で調べたり考えたりまとめたりという活動においては、発表者から質問されたり、迷っている発表者に対して助言したりすることはあっても、干渉しすぎてしまうと、調査やまとめがはかどらなくなった

り、教員の見解に引きずられたりしてしまうので、望ましくないと思われる。あくまで発表者が、自身の問題意識のもとで調べまとめ考察することが望ましいであろう。

それでは、調べ学習についての学生のコメントを引用して、それに対して若干の考察を加えてみたい。

- ・著者の経歴を知ることができた。毎回、調査を重ねて学びを深めたい。(H)
- ・調査を進め、テーマを決定することができた。『白雪姫』に決めた。(I)
- ・絵本に決定した。一つの物語に使われている言葉の意味やあらすじを考えたい。(M)
- ・発表のテーマを決めて、調べた。作者や作品についていろいろ調べたい。(S)
- ・『グリム童話』は、昔話を子ども向けにするために様々な改竄が行われたと知った。(Y)
- ・何を伝えたいかを考えて発表することが大切だ。好きな作家は世界観が素敵だ。(O)
- ・発表する絵本が決まったので、準備したい。好きな作品なので、調査が楽しみだ。(K)
- ・様々な名作があり悩んだ。良い作品を皆に伝えてゆきたい。調査をがんばろう。(S)
- ・テーマを決めた。いろいろな話がアレンジされている。(K)
- ・考えさせられる内容で、教育にも良いと思った。(I)
- ・ゼミで学んだことを生かして発表したい。調べ学習を有効に使いたい。(K)
- ・余裕をもって調査したい。現場や実習で

生かせるように深く調べたい。(N)

- ・研究テーマは「笠地蔵」にしたい。時代背景や伝えたいことを調べたい。(S)
- ・小さい時に読んでいた作品なので、今と昔の物語のとらえ方の違いにもふれたい。(T)
- ・いろいろ想像が膨らんで研究が楽しみになった。(Y)
- ・自分の知らないことがわかってきて、楽しみになってきた。(T)
- ・やりたいテーマを自由に選べるから調べやすい。(N)
- ・研究発表を「劇遊び」にした。ゼミとかぶらないように気をつけたい。(K)
- ・テーマを選ぶのが大変だった。膨大な量の中から適切な資料を選ぶのは大変だ。(T)
- ・童話を調べようと思った。いろいろな童話を読んで、知識を増やしたい。(K)
- ・絵本をたくさん書いている人に着目して、有名な作品とその評価を調べたい。(N)
- ・発表テーマを決め、具体的にどのようにレジュメを作るかを考えた。(M)
- ・ノンフィクションにしたが、ピンとこない。本嫌いを克服するチャンスだ。(K)

題材の選択や研究発表の方法が基本的に自由であるからこそ、学生がやりがいを感じている様子が見られる。また、研究発表という機会を自身のスキルアップのために生かしたいという姿勢も見られる。調査してゆくうちに、作品についての発見もあったようである。

調べ学習も回を重ねると、さらに深まってゆく様子が見られる。2回目以降のコメントである。

- ・昔話は決まった作者がいないので、いろいろな推測を含め、自分の考えを出せておもしろかった。(S)
- ・発表までの流れを確立した。わかりやすいものになるように整理したい。(H)
- ・「笠地蔵」は、どこの地域の話なのかわかった。昔話を調べると面白い。(S)
- ・わらべうたの歴史、種類、子どもへの影響、活用法などを調べた。(N)
- ・歴史上のイソップという人物の話のあらすじ、登場人物について詳しく調べた。(T)
- ・『まちのねずみといなかのねずみ』に決めた。読んで、心が落ち着く、と感じた。(S)
- ・こんのひとみさんについて知ることができた。実話なので、作者の思いが強い。(K)
- ・「死」を扱う絵本に決めた。子どもに「死」というテーマをどう表現し伝えるか。(S)
- ・調べる内容をどのように広げてゆくかが、問題だ。同じ物語でも、絵本によって少しずつ違う。(N)
- ・本から作者の気持ちを想像するのは面白い。保育上の活動についても考えたい。(T)
- ・アイヌについての絵本探しをした。(T)
- ・聞いている人が良くわかるようにしたい。(K)
- ・シリーズ化しているものなので発表の方法を工夫したい。(K)
- ・アンデルセン、グリム、イソップの違いを、特定の童話にしばって調べたい。(K)
- ・『しあわせになった捨てねこ』を題材にする。生物に興味がある年頃だからだ。

(K)

作品や作者、題材などの大枠、そしてさらにその中の何を取り上げるかについて、少しずつ具体性が出てきているようだ。作品、作者、他作品との比較、作者のメッセージ、教育的意義など関心のある題材について、機会をとらえて助言をするようにしている。

そして、レジュメと発表原稿の完成に向けてのコメントである。

- ・レジュメが完成した。発表までに計画を練っておき、皆に伝わる発表をしたい。(H)
- ・作品の歴史を調べることができた。パワーポイントで発表したい。(M)
- ・原作との違いを比較しようと思う。(O)
- ・『妖怪ウォッチ』について調べ、3つのアニメーションの共通点を探した。(K)
- ・『花咲か爺さん』の犬は、神の使いと考えると説明できる。(K)

発表の形態や方法、内容の骨格などが整ってきている様子が見えてくる。ここまでの間に、学生からはいろいろと発表に関する質問を受けたり、こちらから問題を投げかけたりして、深い発表になるように心がけている。

三、研究発表

履修者の人数によって、発表の準備に割ける時間数が変化するため、準備のために取れる時間はかなり幅がある。履修者が多い場合は、準備のために取れる時間数は少なく、授業外学習で補ってもらう形となる。

レジュメは、発表の1日前に提出してもらい教員の方で印刷するか、もしくは自分で人数分を印刷してくるかという形にしている。

これまで、かなりの多種多様な発表が行われた。学生一人一人が、発表者と聴衆の両方の側を経験することになる。ここでは、発表の様子や発表内容の一部を学生のコメントを通して紹介してゆきたい。

- ・作者や物語を知る良い機会になった。林明子さんの作品は、絵本の中に遊び心というか工夫がされていて面白かった。(T)
- ・『星の王子さま』は、当時の社会などに深く関連して作られた作品だと知り、新鮮だった。発表は緊張した。真剣に聞いて感想を言うてくださったので、うれしかった。(T)
- ・発表を聞いて、自分の発表のイメージができた。時代背景、挿絵、グラフ、年表などを自分の発表に取り入れていこう、と思った。(S)
- ・年表を作ったり、絵を入れたりすると良い。自分の言葉で説明すると、相手に良く伝わる。林明子についての発表は、わかりやすくまとめた。(S)
- ・背景を知ること、絵本についてよく知ることができた。(O)
- ・どのような発表が良いのか、考えさせられた。文字だけでうまく伝えられなければ、年表を入れたりすることでより良いレジュメが作れると学んだ。(T)
- ・表や画像を入れてあってわかりやすい。比較のために映画を見たので、最後の絵本の読み聞かせを聞いて違いがわかり、おもしろかった。『グリム童話』は、少し影があるように感じた。(T)
- ・資料の見せ方、画像の添付や、注目してほしい文章を濃い太字にするなど配慮が

あり見やすく良い。あらすじの説明は、状況に応じて工夫を施すとわかりやすくなる。(M)

- ・レジュメが見やすかった。絵本の読み聞かせも聞きやすかった。画像も入っていてイメージができて良かった。(S)
- ・あらすじを省略してまとめようとするあまり、余計わかりづらくなった。絵本にして発表したら、どう違うのか検証してみたかった。(S)
- ・発表は、声が大きくて聞きやすかった。比較の仕方もわかりやすかった。『人間になりたかった猫』の発表は、原作と劇の違いを細かく調べて丁寧に考察していた。(T)
- ・声が大きくて聞きやすかった。比較も表になっていてわかりやすかった。考察も意見がしっかり書かれていて良かった。ストーリーも理解できた。(S)
- ・ペローが、赤ずきんをかぶせたことを知った。ペローとグリムのあらすじや教訓の違いが面白かった。『人間になりたかった猫』は、本を読んだり、劇を見た。(S)
- ・きちんと調べて発表することは、楽しい。レジュメを作る難しさも痛感した。(O)
- ・『赤ずきん』の背景を知った。『人間になりたかった猫』は話を知らなかったが、原作と劇でこんなにも違うことに驚いた。(O)
- ・『赤ずきん』は、『ペロー童話』と『グリム童話』の両方にあると初めて知った。発表の大変さが伝わってきた。途中で飽きさせないようにすることも大切だ、と思った。(T)
- ・『シンデレラ』の発表はグリム版とペロー

版が詳しく比較されて良かった。最後までではっきりと大きな声で読み聞かせを行っていた。『ぐりとぐら』の発表では、作者の中川さんと山川さんが姉妹だということに驚いた。(S)

- ・『シンデレラ』の発表はあらすじが細かくわかりやすかった。『ぐりとぐら』の発表は作者の年表や年齢まで書いてありよくわかった。わからないところは自分の推測の発表を述べていて良い。(T)
- ・参考文献を持ってきて、実際に見せるのは良い。(S)
- ・中川李枝子さんが、かつて保母さんだったことがわかった。(O)
- ・『ぐりとぐら』だけではなく、『そらいろのたね』にも、ぐりとぐらが出てくるのでつながりを感じた。(M)
- ・『シンデレラ』は、ペロー版もグリム版もどちらも有名だが、発表では違いを明確にできてわかりやすかった。『ぐりとぐら』の発表は実演が上手だった。(O)
- ・『白雪姫』は、王妃の執念を感じた。焼けた鉄の靴を履かされるのは当時の刑罰であった、と知った。(S)
- ・時代背景や社会情勢が作品に影響を与えている部分は、共通してみられる。(M)
- ・『グリム童話』の『白雪姫』について知り、ディズニーのアニメーションとの違いが良くわかった。森の動物と白雪姫の関係や王妃の行動など細かい部分がかなり違うことがわかった。(T)
- ・白雪姫が、毒りんごを食べて倒れることしか知らなかった。今回、腰ひもや毒の櫛でも殺そうとしたことがわかった。ディズニーとの比較もわかりやすく良かった。(T)

四、学外施設見学

先述したように、この科目のもう一つの柱は、言葉に関する児童文化財を扱った学外施設の見学である。これまでに幾つもの学外施設を見学してきた。

教員側から言葉に関する児童文化財を扱った学外施設を例示した後、その中から見学先を選ぶ、また、特別展等その時期だけのイベントを選ぶ、学生の提示するイベントを選ぶなどの形で学外施設見学を行ってきた。

見学例としてあげたものでおおむね好評であり、よく利用する施設には、国立国会図書館の分館である国際子ども図書館、稀少な私立の児童図書館でストーリーテリングがさかんな東京子ども図書館、詩人・書家として著名で国語教科書等にも掲載されることが多い相田みつを氏の作品を集めた相田みつを美術館、画家・絵本作家として著名ないわさきちひろの作品を集めたちひろ美術館、物語系の児童文化財として学習しておくべきアニメーションの歴史等を展示した杉並アニメーションミュージアムなどである。

この他、読み聞かせの実演を聞くために埼玉県立文学館や文京区立真砂中央図書館、絵本の特別展を参観するために板橋区立美術館や武蔵野美術大学美術館を訪問したこともあった。埼玉県立文学館では児童書の展示も行っていた。また板橋区立美術館では世界的なボローニャ絵本展の展示が、武蔵野美術大学美術館では絵も物語も学生が創作した創作絵本展が行われていた。